

中央審査会特別賞（優秀賞）

潤う未来

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 三年 喜禎 あさひ

周囲約四十八キロ、面積約五十七平方キロメートル、奄美大島の東方約二十五キロの位置に浮かぶ小さな島、喜界島。この、私の住む島には、地面の下に巨大なプールがある。プールと言っても、普通に想像するあのプールではない。大規模なものとしては、沖縄の宮古島に続いて国内二例目となる「地下ダム」と呼ばれるものだ。地下ダム。地下にダム。この耳慣れない言葉から、それがどういうものなのか、何のために存在しているのか、想像できるだろうか。

ある夏の日、綺麗に区画整理された畑が続く緑の大地には、熱い太陽が容赦なく照り付けていた。気付けば、ここ数日雨が一ミリも降っていない。そんな中、農道を車で走っていると、左右から勢いよくシャワーの水を浴びた。「気持ちいい」直接浴びたわけではないが、畑と畑の間に立つ幾つものスプリンクラーから噴射された水は、風に乗って高く舞い上がり、サトウキビたちは気持ちよさそうにきらきらと輝いて見えた。そう、これが、「地下ダム」から送られる農業用水なのだ。喜界島には、生活用水とは別に、島内に張りめぐらされたもう一つのパイプラインがある。私達の暮らしを守るもう一つの「命の水」だ。

喜界島は、現在でも、年間約二ミリずつ隆起している世界的にも珍しい隆起珊瑚礁の島だ。その土地の地層には特徴があり、下層に不透水層の基盤、そして、その上層を石灰岩が覆っている。石灰岩は、多孔質で透水性が良かったため、降水は速やかに地下に浸透し、海に流れ出ていく。そのため、喜界島には河川がない。その上、梅雨と台風の時期に集中して雨が降るといふ気候の特徴もあり、年間約二千ミリ以上の降水量があるにもかかわらず、島の農業は、度々水不足に悩まされてきた。

そう、そこで、地下を通して海に流れ出る水を、地下に止水壁を造ることによって、石灰岩層に貯えておくという仕組みが、この「地下ダム」というわけだ。

「そろそろ、第二地下ダムの建設が始まるよ。これからは、更に、島の農業は発展するよ。」父が嬉しそうにそう話した。私の家は黒糖焼酎の造り酒屋だが、その原料になるサトウキビの栽培も行っている。しかも、有機栽培だ。そんなこともあり、私も小さい頃から農業について多少の興味を持っていた。「雨待ち農業」地下ダムがなかった頃の苦労や収量の不安定な状態を、島の人はよくそう言っていたが、今は、日照りが続いても、トラックで大量の水を運んで畑に撒く必要がなくなり、仕事はだいぶ楽になった。そして、計画的に、更に挑戦する農業へと繋がっている。

私の父はよくこんな話をする。「豊かになった大事な水資源を活かしていくために、もつと環境にも目を向けていかなくてはいけない。」水は、生物が生きるために何より大事なものだ。私は、最近思うことがある。地域の奉仕作業に参加した時の街の中や海岸、畑の畦道などのゴミの量がとても気になるのだ。空き缶、ペットボトル、お菓子の袋、そしてタバコの吸い殻など、土地を汚しているそれらは、地下ダムの水に何らかの影響を与えてはいないのだろうか。理科や社会科の授業で学んできたように、世の中は循環している。健康な心と体を維持するためには、安全な食べ物が必要で、その食べ物は、安全な土地から作られ、それには安全な水が必要になる。せつかく、地下ダムによって良い環境が整うのだから、私達はそれを十分に活かしていくような行動をしなくてはならないと思う。

さあ、いよいよ「第二地下ダム」の建設が始まる。私は、中学生の立場から、持続可能な島、社会を作るために、今、自分にできることを考えていきたい。この喜界島が、永遠に豊かな水に溢れ、動植物も、私達人間の生活も命も、すべてが潤い続ける未来のために。